服飾にみられるジャポニズムの多変量解析による情報伝達の認識評価

芳住邦雄* 熊谷伸子** 深井晃子***

Evaluation of Recognition of Information Transmission on Designs of Japonism in Western Costumes by Multivariate Analysis

Kunio Yoshizumi Shinko Kumagai Akiko Fukai

Abstract Five kinds of clothing patterns were selected from the designs of Japonism in western costumes for the evaluation by multivariate analysis. Sixty-six female college students were used as The subjects to get their responses by five ranking to evaluate 21 terms. The principal component analysis were carried out to obtain principal components and component scores under the condition of varimax rotation. The main principal components to evaluate the designs of Japonism in western costumes were determined as follows: The first is whether it is decorative of simple, the second is whether it is traditional or modern and the third is whether it is familiar or not. Moreover, individual recognition of the subjects were examined through their component scores. For the characteristics of costume design, the evaluations of subjects were observed to be convergent or disperse. This study offers the example that the evaluation will be changed through information transmission and will have common recognitions.

（キーワード　デザイン：Designs，情報伝達：Information Transmission，ジャポニズム：Japonism，多変量解析：Multivariate Analysis，洋装：Western Costumes）

1. はじめに

ファッション情報をいかに受容し認識するかは，個々の受け手の感性およびそれまでに涵養した認識量に依存する。しかし，一方では共通の評価の領域も存在すると見込まれる。

本研究では，服飾における一定の流れにありながらも，異なる印象を与えると思われるパターンを摘出し，それらを刺激として被験者に与えた時の評価に対して，多変量解析の手法を適用しようとするものである。人類の文化的側面を構成し歴史的にも大きな要素であるファッションに着目して，その認識の要因を解明するための基礎的な検討を行うことが，本研究の目的である。

従来より，被服関連の分野では着装のイメージを検討した報告[1~3]は少なくないが，因子の摘出に止まっている。各着装相互の関連および個々の被験者の認識の変動幅に言及した報告は，乏しい現状にある。

本研究では服飾に現われたジャポニズムを被験者への刺激としていることが大きな特徴である。ジャポニズムとは，西欧における工芸，建築，音楽，文学，演劇等の様々なジャンルの芸術表現における日本美術の影響と言える。服飾にかかわるジャポニズムについての研究が近年進展し，その体系化が深井らによって進められ

* 共立女子大学
** 文化女子大学
*** 神戸女子大学

つつある[4~6]。こうしたジャポニズムの与える印象が一般の人々においていかなる情報として評価されているかの研究は，これまで充分ではない憾みがある。

かかる状況の下での本研究は，ファッション情報の受け手側の多様性による変動と不遍性について，有用な知見を蓄積する意義を有するものと考えられる。

2. 実験方法

2-1. 着装パターン

「モードのジャポニズム」展の図録に収録されている図版から，**図1～5**に示す5種類の衣服を選び出した[4]。この際には，時代的な幅および着装の種類の広がりをできるだけ包含して，被験者への印象が広範に異なるように留意した。

2-2. 印象用語の選定

着装を評価する用語として，**表1**の21語を用いた。これらは，深井の著書[5, 6]に現われる衣服を形容している用語を書き出し，類似した

図2　リンカーのコート（1913年頃）

図1　ウォルトのイブニング・ドレス（1894年頃）

図3　ババーニのカクテル・ドレス（1925年頃）

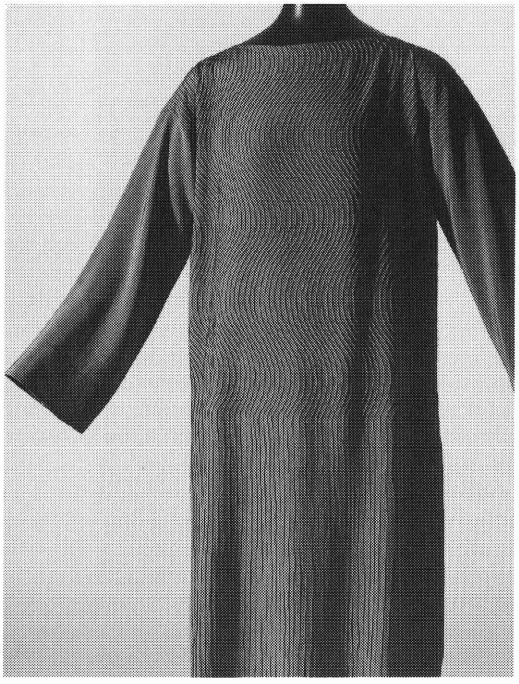


図4　ヴィオネのドレス（1925年頃）

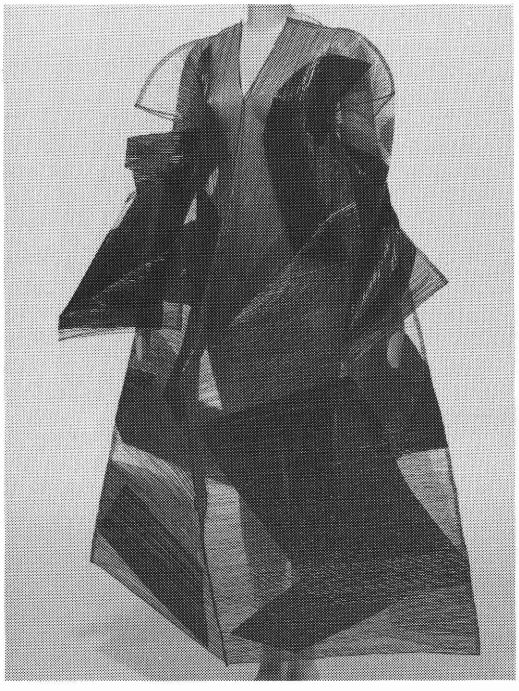


図5　三宅一生のコート（1995年春夏）

表1　21語のカテゴリー

1	ゆるやか
2	近代的
3	タイトな
4	セクシー
5	西欧的
6	親しみ感
7	地味な
8	日本的
9	抽象的
10	平面的
11	懐古的
12	自然感
13	立体感
14	華やかな
15	伝統的
16	装飾的
17	歴史的
18	独創的
19	貧相な
20	具象的
21	無機的

重複語，固有名詞的なものを削除すると共に，広範囲な印象を網羅可能で，かつ，対語となるものを重点的に選び出したものである。

2-3. アンケート調査

5種類の図版を同時にではなく，一枚ずつ示し，表1の用語に対して5段階の評価を被験者に求めた。すなわち，「かなり強い」，「やや強い」，「ふつう」，「やや弱い」，「かなり弱い」の評価であり，これらに5，4，3，2，1，の評価得点を割り当てた。被験者は，共立女子大学被服学科3および4年次の女子学生66名である。実験は教室内で行い，回収率は100%であった。

2-4. 多変量解析

表1の21語をカテゴリーとして，330ケース（66人×5パターン）に対する主成分分析をデザインテクノロジーズ製STATISTICAを用いて行った。バリマックス回転を施した。因子負荷量および因子得点を求めた。

3. 実験結果および考察

3-1. ジャポニズム衣服5種類着装全体の印象を支配する要因

5種類の着装について，全体としての印象を，

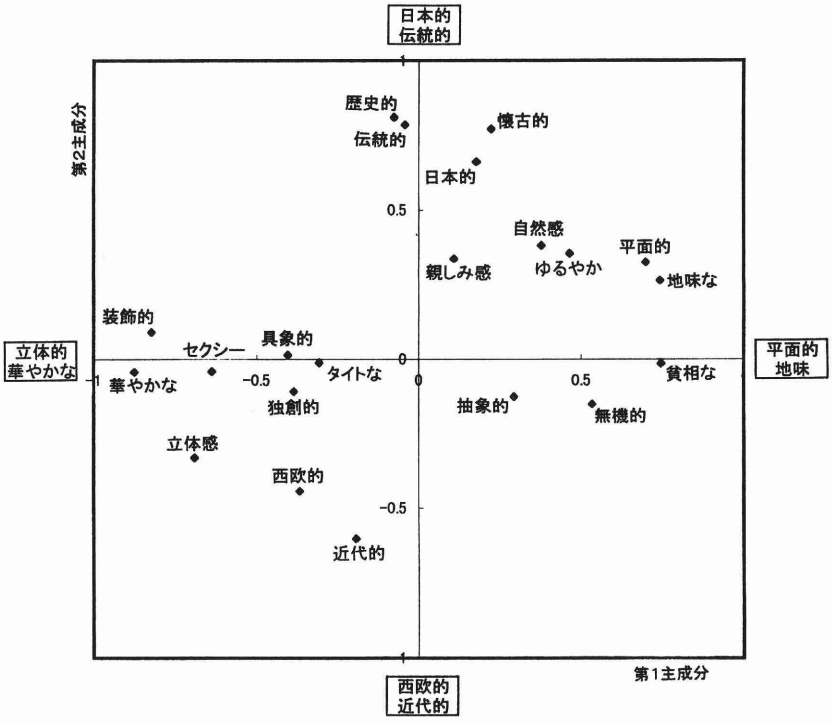


図6　服飾に現われたジャポニズムの主成分分析における第1主成分と第2主成分の関係

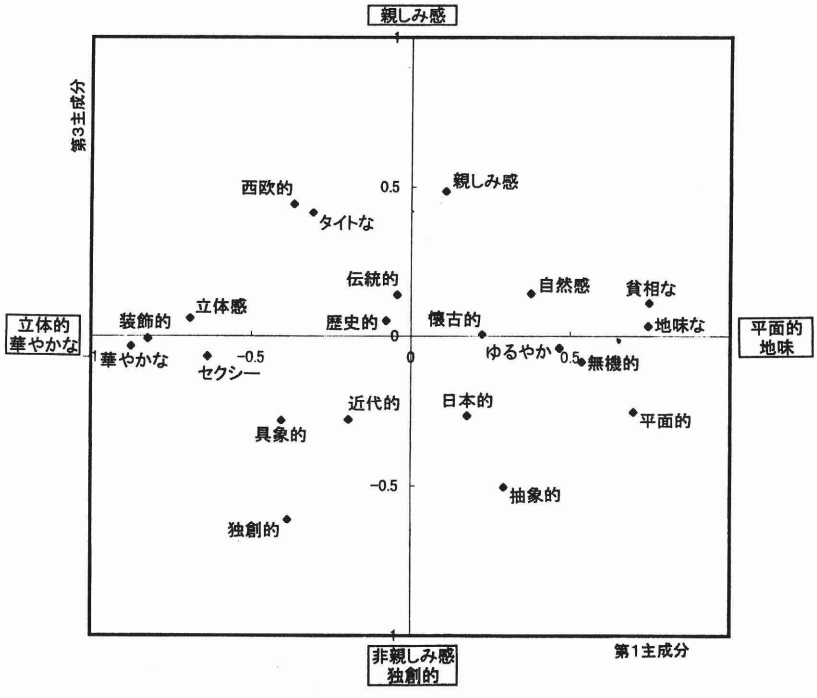


図7　服飾に現われたジャポニズムの主成分分析における第1主成分と第3主成分の関係

主成分分析による第1因子，第2因子，第3因子として算出した。**図6**は，第1因子と第2因子の二次元表示であり，**図7**は第1因子と第3因子の同様の関係である。各因子の固有値によれば，第3因子までで約5割の説明力がある。

図6における各用語が布置している状況を見るに，第1因子のプラス側に，地味な，貧相な，平面的があり，第1因子のマイナス側に，華やかな，装飾的，立体感がある。これらから，第1因子の意義はプラス方向が「平面的な要素を含み地味である」であり，マイナス方向が「立体的な要素を含み華やかである」であるとして解釈される。

さらに，縦軸の第2因子を見ると，プラス側に歴史的，伝統的，懐古的，日本的が布置し，マイナス側に近代的，西欧的が布置している。したがって，第2因子の意義はプラス方向は，「日本的な要素を含み歴史的、伝統的である」として，また，マイナス方向は様「西欧的な要素を含み近代的である」として解釈される。図7をみると，横軸は，前述の通りであるが，縦軸のプラス側には，親しみ感，西欧的，タイトな，が布置し，マイナス側には，独創的，抽象的が布置している。これらから，第3因子の意義は，プラス方向が「親しみやすさ」，マイナス方向が，「親しみ感から遠い独創的，抽象的」として解釈される。

以上をとりまとめると，本研究で選定したジャポニズムの影響を受けた5種類の着装の印象は，装飾的か地味かという要素を寄与率29%の第1の主要な要因として，伝統的か近代的かを寄与率14%の第2の要因としており，さらに，親しみ易いかそうでないかを寄与率7%の第3の要因としていることが結論される。これらは，女子学生66名による集合的な判断であるが，著者らの経験に基づく美学的，比較文化学的考察からも肯定しうるものと言える。

図8は，本研究で用いた評価用語間の関係を，クラスター分析した結果である。ウォード法によりユークリッド距離を求めた。被験者が21語のどれとどれが近接していると認識しているかを示したものと言える。装飾的と華やかが近く，また具象的と立体感が近く，それにセクシーが連なり，西欧的，さらに近代的，独創的を含めて一つのグループを成していることがわかる。

無機的，抽象的が近く，また，平面的，日本的が近く，それらが合流し，一方では，貧相な，地味なが近く，また，自然感，親しみ感が近くこれらの合流に，前述の4項目が合体し，さらにタイトな，が加わって，別のグループが形造られている。

これらとは別に，歴史的，伝統的が近くこれに懐古的が加わり，さらにゆるやかが，合流して一つのグループを形成していることが読みとれる。

こうした関連は，前述の評価と矛盾することなく，本研究で用いた評価用語の妥当性を示唆しているものと考えられる。

3-2. ジャポニズム衣服5種類個々の着装に対する被験者個々の評価

図9（1）は，図1に対する個々の被験者による評価を，第1因子および第2因子について平面表示したものである。図9（2）には，同様の結果を第1因子と第3因子の関連において示した。

ここで評価の対象となった図1はウォルトによる1894年頃作のイブニング・ドレスである。アイボリーのシルク・サテンを素材とし，ボディスのジャボと襟ぐりは，ピンクのシルク・シフォンである。これは，19世紀末に流行した西欧独特のシルエットを持っている。しかし，スカートに施された朝日に湧き出るような雲のモチーフは，まるで日出づる国、日本を連想させる。モチーフの構造自体も，アール・ヌーボ期独特の沸き立つ構造を持ち，左右非対称である。これ以前の西欧には見られなかったこの左右非対称は，日本の美術・工芸・あるいは着物から影響を受けたと思われる。

さらには，平面的衣服構造の着物には，ごく日常的に認められる「絵羽」，すなわち，衣服を平面に見立ててデザインを置くという考えが，これには見られる。衣服の構造を何よりも立体

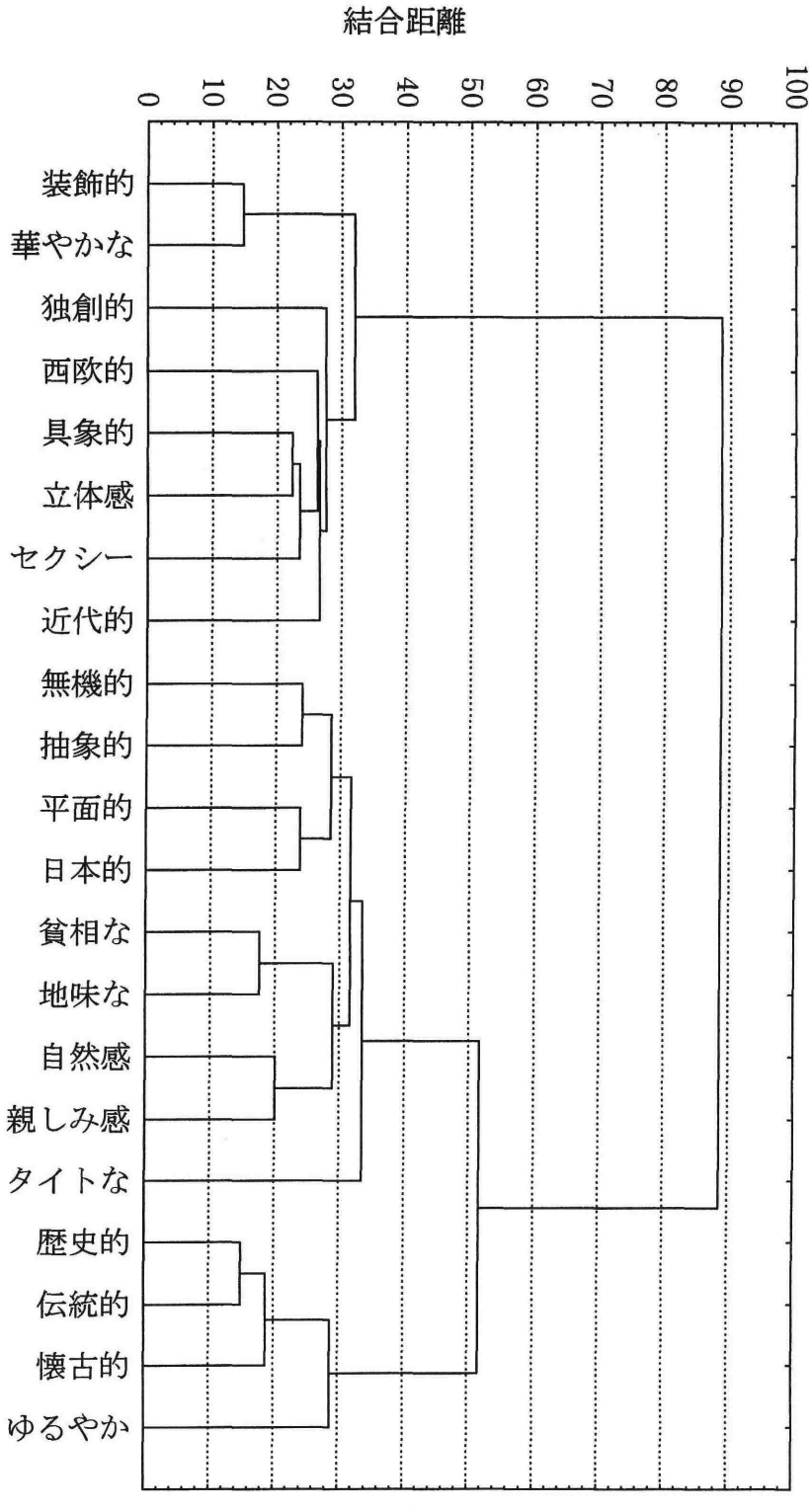


図8　主成分分析における変量として用いた21語のクラスター分析による相互関係

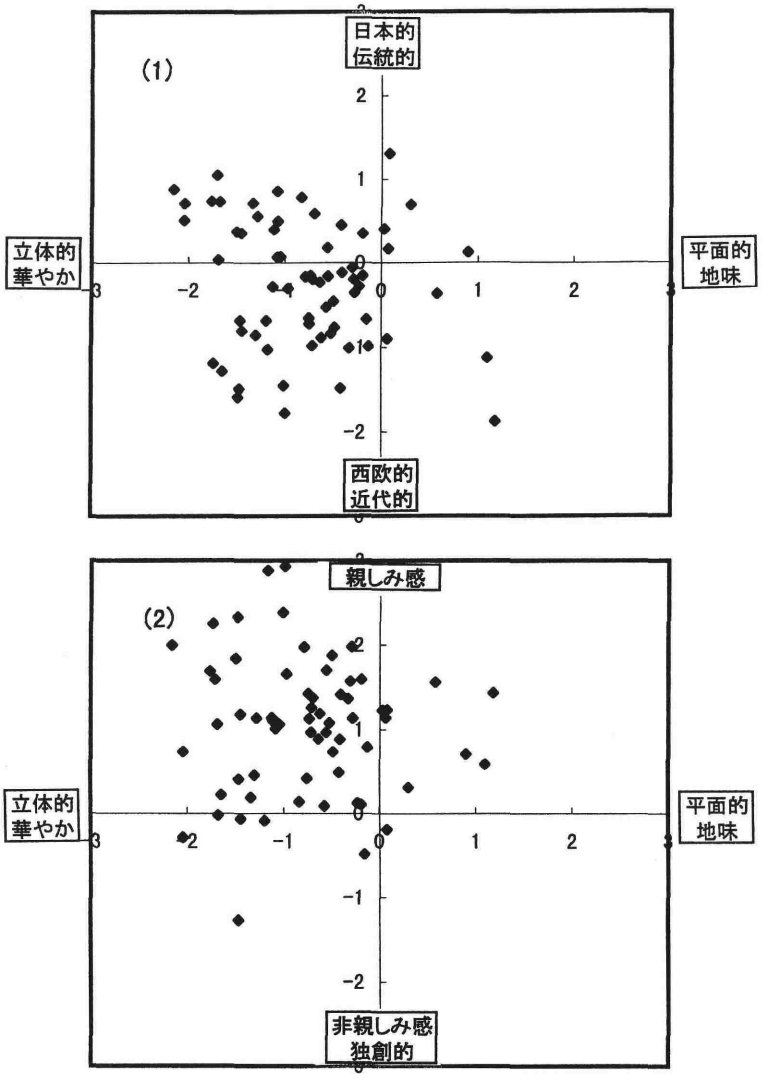


図9　ウォルトのイブニング・ドレス（1894年頃）の主成分分析における主成分得点による評価

として捉える西欧の衣服には，きわめて希なことであり，これ以前には見当たらない[4]。

被験者である女子学生たちは，図9（1）の第1軸については，マイナス側に集中していることから，装飾的で華やかなものとして評価していることがわかる。第2軸の評価では，マイナス側への偏りが大きいが，プラス側へのバラツキも少なくはない。衿に付けられたレース飾りやビーズの模様を現在のファッションと比較し，やや野暮ったく懐古的に見た者があるのかもしれない。一方では，シンデレラの物語などに象徴される舞踏会のドレスのようで西欧的と見た人もあって，第2軸のマイナス側への分布となったと思われる。

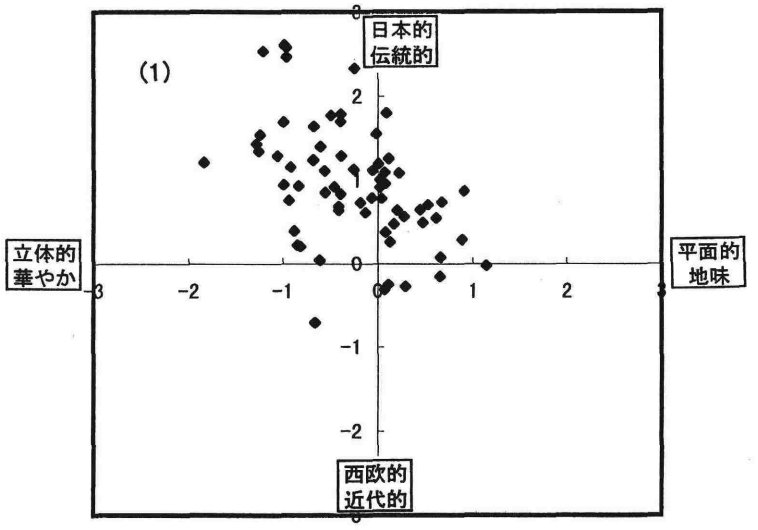
さらに，図9（2）の第2軸では，独創的，抽象的な印象はほとんどなく，親しみ感のあるタイトなものと多くの人が受け止めていることがわかる。

図10（1）および図10（2）は，同様に図2に対する各被験者の評価である。図2は，リン

カーの1913年頃のコートである。黒のシルク・サテンと黄緑のシルク・クレープを用いている。黒と緑のシルク・サテンを段に折り重ねた伊達衿風，花文およびオリエンタル・モチーフのビーズ刺繍，裾の部分がホップルになったコクーン・シルエットを特徴としている。

西欧でもよく用いられるパルメット唐草という感も免れないが，抜き衣紋風の衿使いなどを総合して考えると，歌舞伎衣裳を意識して作られた可能性が高く，花勝見唐草の文様をモチーフとしていると見られる[4]。

図10（1）の第1軸では，黒地に鮮やかな緑色のコントラストから，華やかさ，装飾的を意味するマイナス領域への少なからぬ分布と共に被験者の一部は，平面的な渋さを感じていることがうかがわれる。第2軸では，プラス側に著しく偏っており，日本的な要素を含めて歴史的，伝統的な印象を受けていることがわかる。キモノ的な形態が色濃く表現されているためであろう。



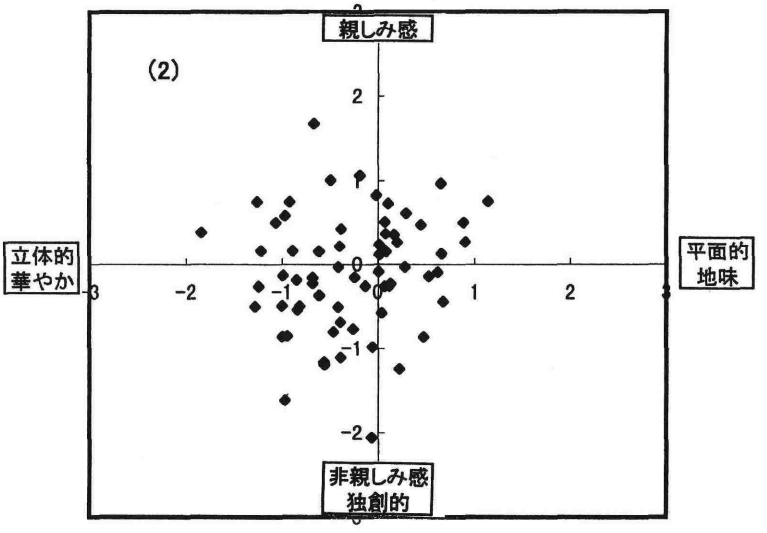


図10　リンカーのコート（1913年頃）の主成分分析における主成分得点による評価

一方，図10（2）の第2軸では，プラス側およびマイナス側にほぼ均等に分布しており，親しみやすさへと独創的なものへとの評価が相半ばしているようである。現在の日本人の着装が，西欧化されてしまい，日本的なものへの親近感が一部では薄れてしまったことの反映かもしれない。

図11（1）および（2）は，これまでと同様の結果であり，図3に対する各被験者の評価である。図3は，ババーニの1925年頃のカクテル・ドレスである。全ラメ・ジャガードであり，織りとプリントで幾何学柄と花柄を構成している。

このドレスの形態は，シンプルであるが，服地が凝っていることに特徴がある。金色の地，腰から下の織りとプリントによる梨地風の質感，その中に屏風風に配され様式化された花と幾何学柄は漆工芸を思い起こさせる。日本の漆工芸は，ジャン・デュナンをはじめとするアールデコの工芸家達に影響を与え，本作品を含めて，

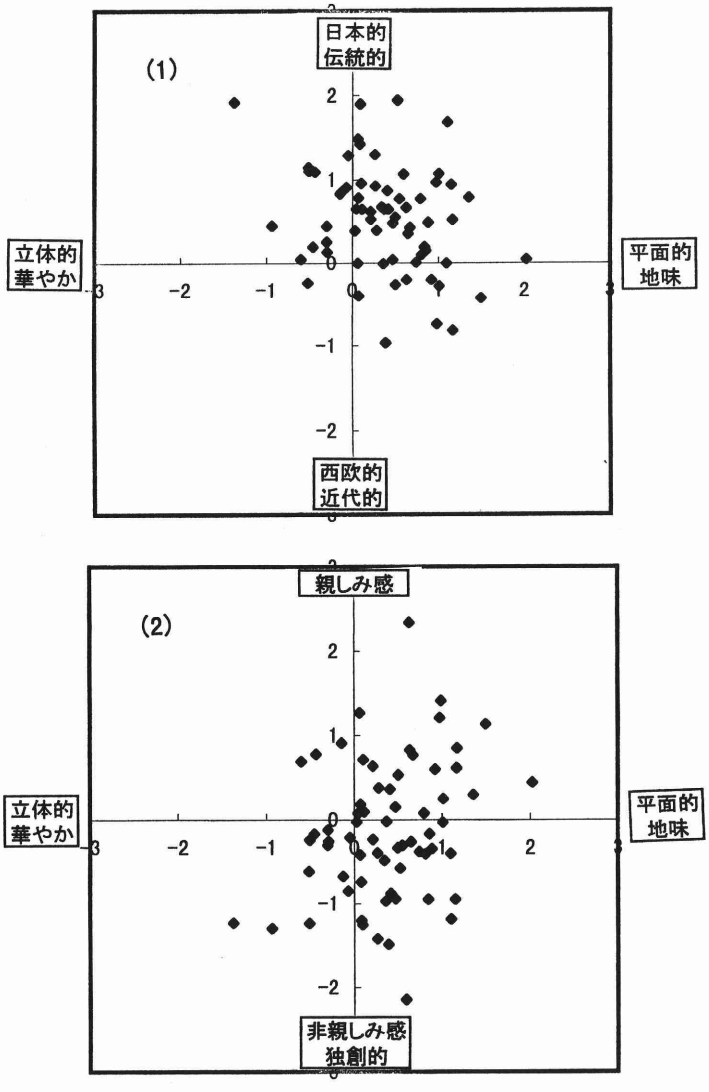


図11　ババーニのカクテル・ドレス（1925年頃）の主成分分析における主成分得点による評価

テキスタイル・デザインに反映された[4]。

図11（1）の第1軸でみると，プラス側への偏りが大きく，被験者の多くは地味で平面的な印象を持ったものと思われる。第2軸については，プラス側への偏りが明瞭であり，歴史的，伝統的な評価が強くなされたことがわかる。この作品の生地は，鈍い金色で，袖は袖口にいくほど緩くなり，花と幾何学模様もまた，わが国の古典的な感覚を思わせることが，上述の評価になったものと考えられる。

さらに，図11（2）の第2軸では，プラスおよびマイナス両方向への変化幅が大きく西欧的な親しみ感と異質なものとしての受け止めが混在し，被験者によって大幅に評価が異なったものと思われる。

図12（1）および（2）は前述までと同様の関係である。図4が評価の対象である。図4は，マドレーヌ・ヴィオネの1925年頃のドレスである。グリーンのシルク・クレープで見頃全体に波模様がピンタックされている。ボートネッ

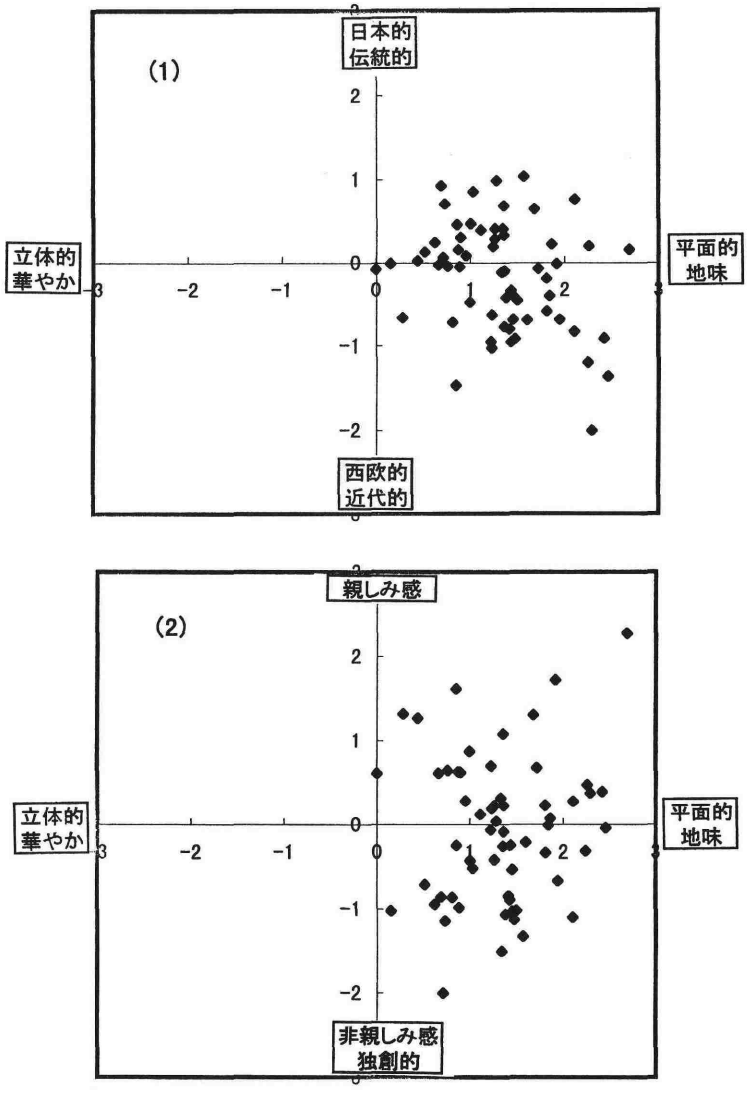


図12　ヴィオネのドレス（1925年頃）の主成分分析における主成分得点による評価

クの直線的なシルエットが特徴となっている。

ヴィオネは，プリーツやタックを好んで用いた。タックが持つ機能を生かしつつ，装飾としての効果を活用した。この作品は，全体のシルエットはまっすぐで平坦であるが，脇の縫い線および袖付けは，ピンタックで形どられた曲線に合わせて縫製されている。諧調の配列による構成美を求めたこのドレスは，砂で雲海を表わし，集団的に組み表わされた庭石の配列によって空間構成の美を求めた枯山水文様に関連していると言えよう[4]。

図12（1）の第1軸では，プラス側に全被験者の評価は集中し，地味で，無機的な平面的な印象を与えていることがわかる。全体のモス・グリーン一色で，飾りがないことによるものであろうか。第2軸では，マイナス側への偏りがやや多めであるが，プラス側への分布も少なくなく，歴史的，伝統的評価と近代的，西欧的な評価が相半ばしていると言える。

地の文様をみると，禅寺の砂の軌跡のようで

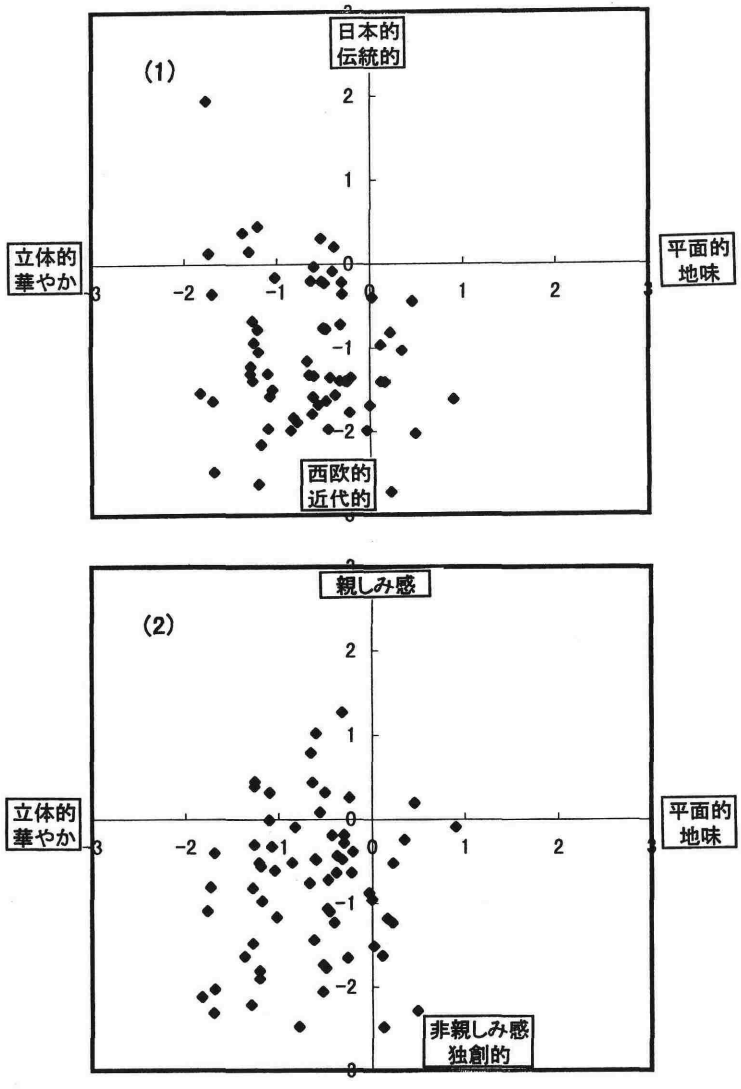


図13　三宅一生のコート（1995年春夏）の主成分分析における主成分得点による評価

もあるが，全体のシルエットだけをみるとIラインのワンピースのようでもあり，前述のような評価に分かれたと言える。

図12（2）の第2軸は，プラス側およびマイナス側共に大きく広がって分布している。西欧的親しみ易さと抽象的，独創的な感覚が被験者の感性によって大幅に交差したためと考えられる。

図13（1）および（2）は，図5に示した三宅一生の1995年春夏のコートの評価である。この作品は，透明のポリエステル・モノフィラメントを用い，裏から同素材のパッチをアップリケしたものである。服作りの限界に挑戦し続ける三宅一生は，合繊繊維の持つ新しい可能性を追求しながら様々なデザインを試みている。能衣装のようなフォルムを最新の技術で作り上げたものである。多彩な色彩のアブストラクトな形の布がコートの裏にアップリケされている。軽い仕上げであり，透明なコート地を通してカラフルな柄が，二重三重に透き通って見える[4]。

図13（1）の第1軸では，マイナス側に大部分が分布し，装飾的で華やかな評価がなされていることがわかる。第2軸でも，マイナス側に圧倒的に集中し，西欧的，近代的な印象を与えていることがわかる。図5に示されているように素材は，透明で透けて見え，形は確かに能衣装を模しているが，近未来的な連想を促すために，こうした評価となったものと思われる。

図13（2）の第2軸では，マイナス側への偏りが大きく，独創性への評価が強いことが明瞭となっている。

4. 総　　括

ファッション情報発信と受信の間における関連解明は，服装社会学における基礎理論の構築に重要な役割を果たしうるものと考えられる。本研究では，服飾に現われたジャポニズムに着目し，この流れの中にはあるが，異なる印象を与える着装を5種類摘出して，女子学生グループを被験者としてそれらへの評価の特質について検討した。評価用語21語に対する適，不適を5段階に評価し，主成分分析を適用した。

本研究で対象としたジャポニズムの服飾を全体として評価するための要因は，第1は「平面的な要素を含みじみである」か，あるいは「立体的な要素を含み華やかである」。第2は「日本的な要素を含み歴史的，伝統的である」か，あるいは「西欧的な要素を含み近代的である」。そして第3には「親しみやすさか」，あるいは「親しみ感から遠い独創的，抽象的」かであることが明らかになった。

さらに，被験者個々の判断は，着装として選定された5種類のジャポニズムの服飾の特性に応じて変動することが確認された。すなわち，被験者全体が，いわば一致した集中的な傾向を有する評価がされる場合と大きな変動幅を伴う評価がなされる場合があることが判明した。情報の種類によっては，受信者の層が一定であっても評価が大きく異なりうることが，事例として本研究で確認されたと言える。

参 考 文 献

〔1〕富士香菜子，酒井哲也，酒井豊子，新旧ファッションに関する女性の識別行動，日本家政学会誌，vol. 47，1996，589～597

〔2〕奥田聡子，黒田喜久枝，中川早苗，服飾における女らしさについて，繊維機械学会誌，vol. 42，1989，407～415

〔3〕川本英子，渡辺澄子，黒田喜久枝，中澤乃智子，中川早苗，服飾イメージの嗜好傾向と被服行動の関連，繊維機械学会誌，vol. 45，1992，T207～T217

〔4〕深井晃子編，モードのジャポニズム図録，東京クリエイションフェスティバル実行委員会，1996，16～27，68～69，80～82，108～110，115～116，188～189

〔5〕深井晃子，ジャポニズム　イン　ファッション，平凡社，東京，1995

〔6〕深井晃子，パリ・コレクション，講談社，1993